

留学生との交流による多文化共生のまちづくり

—とくしま異文化キャラバン隊の活動を通して—

A Multicultural Approach to Community Design:

TOKUSHIMA IBUNKA CARAVAN

徳島大学国際センター Gehrtz 三隅 友子

Gehrtz-MISUMI Tomoko

(International Center, Tokushima University)

キーワード：サービスラーニング、プロジェクトワーク、演劇的知、多文化共生社会

1. はじめに

徳島大学国際センターは平成 25-27 年度に文部科学省の委託により留学生交流拠点整備事業「異文化キャラバン隊による国際化と新たな地域の創成-留学生との交流による多文化共生まちづくり-」を実施した¹。本事業は留学生らの地域における様々な交流活動を通して、地域の課題を一緒に考える基盤づくりをするものである。課題として「多文化共生のまちづくり」を掲げ、事業に関わった人たちが3年間の取組をまとめ、まちづくりを行動に移すための提言（合言葉）を考えることも行った。本稿では事業全体を振り返り、現段階で得られた知見を記述する。今後はとくしま異文化キャラバン隊の活動を「サービスラーニング」に位置づけ、大学に与えられた「地域の知の拠点」・「地域創生の推進」の役割を担い、かつ展開することを考えたい。

2. 徳島大学留学生交流拠点整備事業

2.1 概要と4つのPLAN

本事業は、徳島大学が中心となって地域コンソーシアムを組織し、徳島県内の高等教育機関（5大学、1高専）に所属する留学生と日本人学生からなる「異文化キャラバン隊」を県内各地域のイベントへ派遣することにより、地域の人々との異文化交流を通じて「外国人が身近にいることが当たり前の国際社会」「文化や習慣の違いを認め合いながら暮らしている姿」を目標とした。同時に、留学生らの日本語と日本文化の学習とともに、異文化交流を通じた地域の活性化と外国人と共生できる人材の

育成をも目指した。実際には徳島県内において次の4 PLAN を実施した²。



図 1 4つの PLAN と県内地域との関係

PLAN 1 : 徳島市内の様々な組織や団体との交流による教育活動

留学生の所属する大学が集中している市内の様々なイベントへ参加することにより、触れ合う機会を持ち日常的なつながりを促進することを目的とした。小中高、専門学校等の教育機関、公民館、美術・博物館等の文化施設さらに NPO 法人と共に企画し実施する。

PLAN 2 : 「まほろば国際プロジェクト」

＝徳島県西部美馬市「協町劇場オデオン座」での演劇を中心とした活動

地域の文化財を守ることを目的とし、ホームビジット、学校訪問を含んだオデオン座における交流活動（留学生による国紹介・演劇・交流会）である。



PLAN 3 : 「日和佐の魅力発見！プロジェクト」

＝徳島県南部美波町日和佐八幡神社の祭りを支援する活動

若者の人口減少に伴い、存続が危うい祭りの支援と同時に、中学生・高校生・観光ボランティア等の協力を得て留学生らの視点から町の魅力を見つけ、新たな観光へのヒントとするフォトマップの作成をする。



PLAN 4 : PLAN 1-3 を推進し、それぞれの成果を総括しさらに継続を図る活動

留学生との交流体験から気づいたあるいは培った「受け入れる心」を「強力で永久的なコンソーシアムの構築」から「多文化共生のまちづくり」へと見える形にする役割を担う。

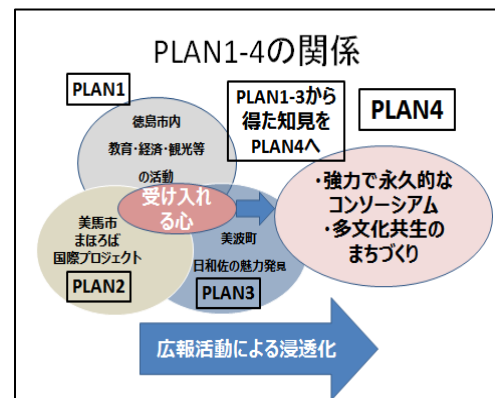


図 2 PLAN の関係

2.2 キャラバン隊の特徴-留学生の学び-

徳島県の外国人数は約 4,000 人（平成 22 年調査）であり、県全体の人口に占める割合は 0.5%と全国平均の半分以下である。また在住外国人のうち 8 割が都市部に集中している。また県内の高等教育機関に所属する留学生数は約 300 人（平成 27 年 5 月）と、地域で外国人を身近に感じることは少ない現状がある。数としては少ない留学生をより効果的に活用する（動いてもらう）ためのしくみが「とくしま異文化キャラバン隊」である。そのために次の三つの特徴を考えた。

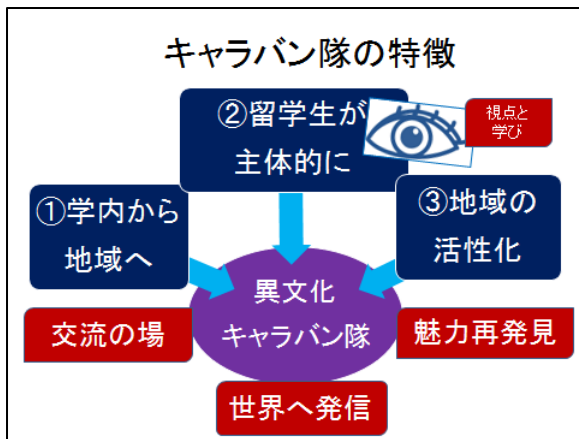


図 3 キャラバン隊の特徴

一つは、交流の場を学内から地域へ移して様々な活動をする。二つ目は、活動自体の設定はコンソーシアム内の担当者がするが、その土俵上での取組は留学生と地域の人たちが主体的に行う。三つ目は、留学生らの視点から新たな町や地域の魅力を発見していこうというものである。最終的には交流活動と再発見した内容を魅力とし、県内外そして広く国内外に発信することも目標としている。留学生は学内で日本語を学び、専門の研究を行っている。大学の一

歩外に出れば、社会の一員としての存在でもある。外国人が日本社会で生きていくための様々な能力は大学だけで培われるものではない。実際には大学と寮とアルバイト先というごく限られた空間と人間関係の中で生活している者もいる。一方キャラバン隊にて体験する活動は、いわゆるサービスマーケティング³に向かうものと考えている。サービスマーケティング（Service-Learning）は、最も広義の解釈として「教育目的で行われる社会に役に立つ活動がやりっ放しではなく、最低限、振り返りの場面をとれない実施されるプログラム」である。

大学で学ぶ専門的な知識や技能等を社会的活動に関わって深く学ぶというより、今学びつつある日本語を使って活動をしていくことから、さらに日本語と日本文化を体験的に理解していくという学びである。当初留学生らにキャラバン隊への参加を呼びかける内容として、①日本語力を伸ばせる②地域で友達を増やせる③徳島の魅力を発見して発信していける、の三つを考えていた。地域の課題を一緒に考えてアイデアを出しながら解決に向かうという視点を入れることも実際には行っている。今後も留学生が実施するサービスマーケティングという位置づけを確認かつ整備していく予定である。

2.3 広報活動

PLAN4 では本事業を多くの人達に知ってもらうための広報活動を初年度の平成 25 年 9 月からスタートさせた（事業の委託決定は 7 月後半であった）。まずポスターとチラシを作成し、県内の教育機関、理容組合、調剤薬局等に配布し各所に貼ってもらえるように依頼した。ハート型に V サインで並ぶキャラバン隊は徳島大学と鳴門教育大学の留学生と日本人学生の 16 名である。

またシンボルマークに千鳥を選び、波間に浮かぶ二羽の千鳥がさらに海に飛ぶ様子をロゴとした。このデザインは、本学のデジタルアート部の学生にデザインを依頼し作成したものである。さらに、留学生らが活動中に目立つように、ロゴを配したオレンジ色のエプロンを50枚作成し、活動中には必ず装着することにした。さらにロゴ入りクリアファイルも同時に作成し、中にチラシを入れて事業の宣伝と共に活動する相手先に配布を行った。



そして本事業の詳細をいち早く広報するためにホームページを作成し、概要と理念さらに実施ごとに活動記録及び新聞、TV等の報道記録を掲載した。徳島大学の大学紹介アプリにも同じ内容を掲載することを3年の間続けた。

2.4 プロダクツ（産出物）

活動を通して、内容の記録と新たな広報の意味でプロダクツ（印刷物と映像）もできる限り作成した。これにはプロジェクトワーク型の教育活動における成果の意味があり、実施者の振り返りと活動を繰り返す中で目標を明確にしていく役割もある。

印刷物は次の三つである。

- ①日和佐の魅力発見！フォトブック（H26年度）
- ②徳島の魅力発見！フォトマップ（H27年度）
- ③日和佐の魅力発見！フォトマップ（H27年度）



これらは、フィールドワーク型のプロジェクトワークの成果物として作成したが、写真と日本語・英語・中国語のキャプションから町の紹介や観光の目的にも使用が可能である。また②と③に関しては、デジタル版を国際センターホームページに掲載している。

映像は次の六本である。

- ①Rediscovery HIWASA（H26年度）12分
- ②まほろば国際プロジェクト3本×3分（平成25-27年度）
- ③外国人お遍路体験（H26年度）5分

④多文化共生フォーラム（H27年度）3分

映像は徳島大学ホームページ内の動画集から視聴が可能である⁴。

いずれも、これらは記録としてだけでなく、活動を一過性のイベントとして終わらせないように、多くの人に見てもらい、自分たちの町や活動にもキャラバン隊の参加を考えるヒントにしてもらうことが目的であった。また留学生らにとっては自らの映像を自国の友人や家族に見せて、地域の活動に参加したことを広く発信することも考えて作成した。

3. 事業の成果

3.1 報告書「多文化共生のまちづくり・未来への第一歩-徳島から発信する受け入れる心の育成」

平成25年9月30日に本事業の第1回連絡会を開催、概要と活動目標を確認しキックオフの場となった（学内外50名の参加）。さらにコンソーシアムの母体である「徳島地域留学生交流推進協議会及び運営委員会（年に1回ずつ開催）」では、事業への協力依頼と経過報告する場となっていた。この中で、商工会議所のように本事業に賛同し、新しい活動の企画が生まれ実施に至ったものもある。またこの間にポスターやチラシを見てキャラバン隊の存在を知り活動依頼が来るようになってきた。当初の目的通り、一般の地域住民とキャラバン隊をつなぐ役割をするコンソーシアムのメンバーが活動を通して次第に明確になってきていた。そこからまとめにむけてそれぞれの物語を作成することを考え始めたのが平成27年の夏であった。こうして平成27年10月2日第2回連絡会を開催し、報告書の作成を依頼した。この報告書の特徴は、単なる活動報告ではなく、①3年の事業の総まとめとする②キャラバン隊との活動を通して生まれた物語を書く③各物語が県内外の同種の組織や機関のヒントとなるように広める、という三つの視点を持つものであった。それぞれの立場から活動を振り返り、「課題（テーマや組織の概要）」、「取組（発見や気づき）」、「成果（様々な視点から）」、「未来に向けて」の四つの観点から書いて、また活動中の写真を多く掲載することにした。これから活動をしたいという人たちに印象強くまた興味深く読んでもらえる工夫を試みたのである。最後の「まとめにかえて」は、活動を通して生まれた新たなエピソードと、他地域の事例を紹介しながら今後徳島で展開する新たな日本語教育事業の可能性も述べている。いずれも、これで終わりではなくまさにこれから始まることを確認した記述である。



もちろん3年を通して、他の組織や機関もあったが代表としてこれらの14の物語を掲載した。執筆依頼の中で原稿作成に至らなかった団体もあったのは事実である。報告書の意味を伝えることができず、パートナーシップが結べていない関わりもあったことが確認できた。しかしこれも第一歩であり、今後活動を企画・運営・評価していきながら新たな関係を構築していきたいと考える。

また違った視点からは、この報告書は本事業への各団体の積極的な参加の結果であり、自己評価と他者評価さらに継続的な改善をも含んだアセスメント（プログラム評価）と言えよう。

報告書の構成	
はじめに	
PLAN 1	Case Studies 14 の物語
PLAN2	まほろば国際プロジェクト
PLAN3	日和佐の魅力発見！プロジェクト
VOICE	留学生の声 4名
まとめにかえて	
資料	活動一覧とコンソーシアム図

PLAN2 の「まほろば国際プロジェクト」は、実践研究として日本語教育と演劇的知の在り方を考えるという位置づけと、文化財としての脇町劇場オデオン座（物的リソース）の存在と活用案を記述している。今後に向けて、学内の日本語教育（外国人に日本語を教える立場）と学外の演劇教育の研究者とのネットワーク（人的リソース）と美馬市の市長以下国際交流員、学校関係者等（社会的リソース）の三つのリソース

図 4 報告書の構成

がそろっている。これらを活用して、最終プロダクツを演劇とするプロジェクトワークを実施することと、演劇に至る過程で町の活性化を図る活動を行い、平成 28 年度も次の研究を含めた段階へと進む予定である。

そして PLAN3 の「日和佐の魅力発見！プロジェクト」は、新たな高大連携を追究しながら、自治体を中心として地域の中学・観光ボランティア・企業が協力するフィールドワーク型プロジェクトワークを行う。成果物のフォトマップとそのデジタル版を活用し、これをもとに町おこしに取り組む団体や人々と協力して、これも次の行動に移す計画である。

PLAN2、3 のいずれも社会貢献の活動として、大学あるいは高校の教科学習と結び付け、教育課程の中で正式に位置づけ、サービスラーニングとして整備していく予定である。

なおこの報告書は電子ブックとして国際センターホームページから閲覧可能である⁵。

3.2 アンケートによる事業評価

3年間のほぼ全部の活動に対して、キャラバン隊参加者と共に活動を行った機関や日本人に対して、アンケートによる評価を行った。

キャラバン隊には、①活動自体について②日本人との交流について③日本や徳島の文化の理解について④今後の活動への参加について⑤感想（自由記述・日英中）⑥活動個別の質問（この活動の改善点等）を問うた。そして日本人には、①留学生が参加することについて②外国人に対する印象に関して③今後の活動への参加について④留学生の視点やアイデアを取り入れたい活動の有無と活動案⑤外国人との交流について（自由記述）を問うた。

平成 27 年度のキャラバン隊の評価（10 活動）は、おおむね活動自体はよかったことや交流ができたことが述べられていた。活動によっては理解があまり深まらなかったものもあったが、もっと参加したいという声は得られた。特に PLAN3 の祭りに関しては、感想意見の中に、この地域の問題点、解

決策、お祭りで驚いたことや自国の祭りとの比較を丁寧に英語や中国語で書いてくれているものも見られた。それらを翻訳して日和佐の人々に伝えることや、共有する機会を作って互いに問題解決を考えることがこれからの課題であることもつかめた。一方の、日本人側の評価（8活動）では、当初参加することへの不安があったり、交流によって印象が変化したりさらに考えが広がったりした等の記述もあり、もっと一緒に活動したいことや活動へのアイデアがこれまでの2年よりも多く書かれていたことが特徴的であった。また「地域の課題を外国人（留学生）の視点を加えて考えることの可能性に気づいた」というコメントもあった。

今後の課題として、キャラバン隊と日本人あるいは受け入れ側の評価項目の立て方を見直す必要がある。それは、中立な問いかけによってより本当の気持ちや考えがつかめるように設計されているか、「楽しかった」という評価に終わっていないかという点と、地域の課題を共に考えるという構造や問いかけになっているのかという点である。なぜこのアンケートを書くのかという意義を明確にして、結果を次の活動に必ず活かすことを伝え、活動に積極的に参加すると同時に評価をすることが大切なことを周知していきたい。またこの評価項目自体もこれまでのものを提示することによって参加者に考えてもらい、一緒に作ることもできるだろう。まさにこの評価を活かした新たな活動設計ができているかがこの事業を継続していくポイントであると考えている。

3.3 提言の作成 -多文化共生フォーラム-

本事業の実施中の平成27年9月に徳島大学には「フューチャーセンター」が設置された。これは従来の枠組みでは解決が困難な社会的事象や課題に対して、組織、所属、立場が異なる多様な人々が集まり、未来志向の対話、デザイン思考の手法から、新たな発想、解決手段を発見・共有し、相互協力の下で共創、社会実践するための「場」である。そして課題解決に向けての活動を「フューチャーセッション」と呼ぶ。本事業との目的が合致すると考え、「多文化共生社会のための提言作成」する最終フォーラムをこのフューチャーセンターにて実施することとした。実際には平成28年1月に①講演（「外国人の人権-隣の外国人と平和に暮らすために-」西原鈴子氏）とワークショップ②キャラバン隊によるスピーチと交流③活動報告会④提言の作成、という内容であった。当日の参加者は一日を通して約50名、高校生、大学生、留学生、県及び市の自治体職員、交流団体会員、NPO法人関係者、教員、学芸員と地域住民であった。さらに、提言作成の際にもこの場は威力を発揮し、五角形になる机と椅子を動かして簡単にスペースが作れることから、インプロ（即興演劇活動）を行うための広い場所が確保でき、個人作業からグループ活動につながった。5グループで絞り込んだ提言をミニドラマにして上演した。

実際にドラマにする前には、例として「学びあおう」を提示し、実演をしてからグループでの作業を行った。このように演劇的知を使うことと、一人一人の考えを明らかにしながら、他者の意見も聞き、それを一つにして協力して演じるというタスクを課すことで「対話」の場をつくることを考えた。

センター内の設備を利用して、フォーラムの内容ごとに参加者に刺激を与え、活動を促進させる機能が果たされ、まさにフューチャーセッションを体感することとなったと考える。また様々な活動の目的に応じた場の使い方ができたように思う。

この提言作成に関しては、とくしま国際フレンドシップ憲章（平成20年3月制定）⁶の合言葉「知りあおう・ふれあおう・みとめあおう」をもとに、事業当初の予定通り、次の合言葉（行動目標）を提言と考えた次第である。25名からの提言には最初のことばとして「知りあおう」が大切とした人もいたが、四つ目の言葉として、「笑いあおう」が三つあげられ、また五つのグループのうち三つが「笑いあおう」を演じた結果となった。

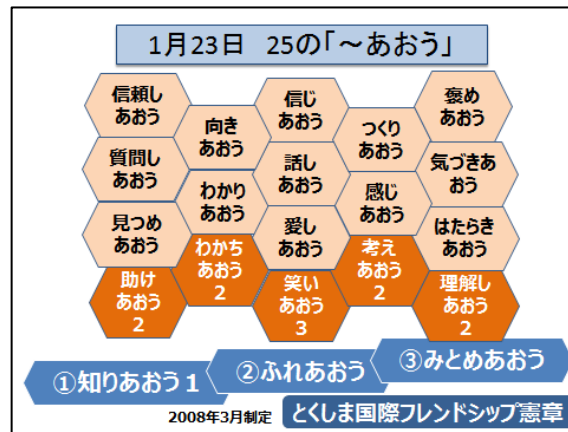


図 5 25名の作成した言葉

フォーラム後、メールによって得られた提言作成に関するコメントは以下の通りである。

「笑いあおう」:「この日は初対面の人ばかりで緊張したが、ふとした時に笑いあってから緊張感がほぐれ、話やすい空気ができたと感じた。笑顔から始めるのがいいと思ったから。」また「笑いあおう」に関して、一人は、「自分も思いついていたから反対はしなかったがあまり納得はしていない。四つ目の言葉としてどうか？その先の望みがやっぱり笑顔ならばよいが、対話が十分なされたとは言えなかった。とはいえチームで演劇をしたことで、文字だけの提言よりは強く自分のものになっている気もする。話し合いも演劇でできたらよかったかも。」また、「憲章が理性なら、笑いあおうは感情である、言葉はいらないし、理屈は度外視。徳島はいつも感情が優先されると思う。『おもてなし』や『同じあほなら踊らにゃそんそん』に続く笑いあおうだと思えば徳島が好きになった。」というコメント、さらに「あの場所に参加された皆さんが、たぶん日ごろから率先されている行動が文字になったのではないかを感じた。笑顔が人を呼び、助けを得られ、理解しあうための大切なツールをしている人たちが集まった結果であり、多くの同じ意見にまとまったと感じる」のコメントもあった。

各自がこの場で考えを持って選ばれた言葉であったことや、敢えて一つにして演じることが難しいと感じたり、演じることで心に残ったと思ったりした様子もわかった。「笑いあおう」がドラマに選ば

れたのは、演じる際にわかりやすいということもあっただろう。ドラマ化「はじめ・なか・おわり」の三つのシーンを表現することを課題とした。ドラマの一例として、はじめで「誰かが泣いている」、なかで「みんなが集まってくる」、おわりで「手を取り合って笑顔で並ぶ」と表現したグループもあった。もちろん言葉は同じでもドラマの三つは違うものであった。

「～あおう」は必ず自分と他者が一緒にする何かである。「一緒に協力してする」ということが一人一人の心に残ることも目的であった。四つ目の言葉を確定するのではなく、その場その場で必要と感じる「～あおう」を声にして、実際に行動することこそがこの提言作成の役割と考えている。

「多文化共生のまちづくり」に関して、知識として理解することと、自らの身体、ことば、そして人との関わりの中でとらえ直し、行動を起こしていくことの両方が重要であることを確認したい。

4. むすびにかえて -多文化共生のまちづくり-

3年間の活動を終えて、現段階での考察をむすびとしたい。

①<留学生の位置づけの変化>

活動を進めていく中でまた3年の年月を経て大きく変わったのは、留学生の位置づけである。「留学生交流拠点整備事業」は、留学生が地域住民と交流を深めながら、地域一丸となって様々な側面の支援を留学生に対して行う仕組みづくりが目的であった。その後平成27年から始まった「住環境・就職支援等受入れ環境充実事業」は、留学生を帰国させるのではなく、就職そして地域に定住ということを目指している。これまで親日派や知日派の外国人を育成するという視点から、自らの地域の構成メンバーとしての留学生の役割に期待していることがわかる。徳島等の地域では留学生が就職を希望しても企業側の受入がまだ進まないという事実も体験した。本活動も後半になって企業との関連を見出している。少しずつコンソーシアム内の企業を増やしつながり深めながら留学生が働ける場を確保していく必要がある。

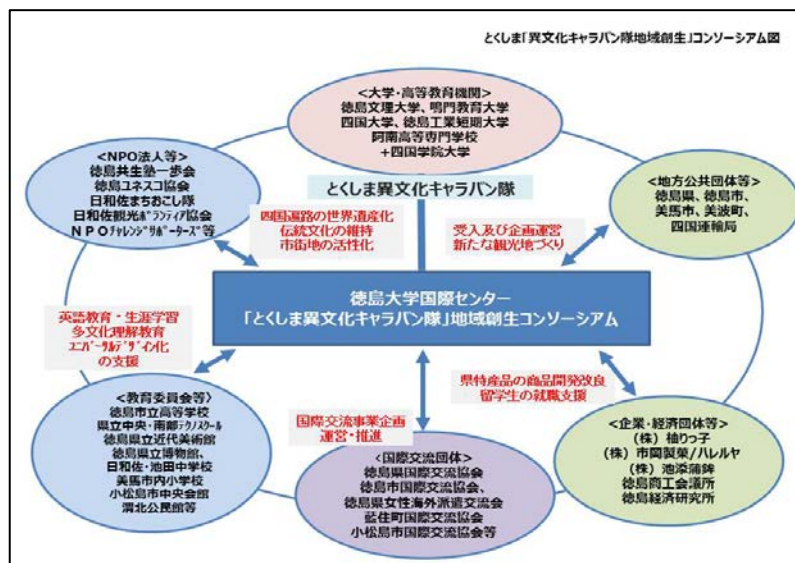


図 6 とくしま異文化キャラバン隊コンソーシアム図

②<日本語教育との関連>

本稿 2.2 で述べたように、この事業における様々な交流活動は、基本的に留学生も日本人も日本語のコミュニケーション能力を高めることを目的に行われている。日本語の初級から上級者まで日本人と日本語を使う場であり、現実のコミュニケーションを行う場である。能力が足らなければ、お互いがわかる他の言語を使ったり、絵を書いたり、ボディランゲージを使ったりと、自らの持つ全てを駆使して目の前の相手とつながる感覚を大切にしながらの「対話」を期待する。日本語学習者にとってはこのようなアウトプットの場と、日本語をクラスであるいは自分で教材を使って学習するというインプットの場の両方がバランスよく提供されると、学習目標の設定のしやすさ、または動機づけの点でも有効である。徳島大学では教室で学ぶカリキュラムと、本事業（活動）を通して学ぶ体験型学習「プロジェクトワーク」を教授法の一つとしての実践研究を続ける予定である。

そして受け入れ側の日本人がわかりやすい日本語を使っているのかどうか、自分のメッセージが相手に伝わっているかという、自らの日本語を振り返る「日本人のための日本語教育」の必要性も唱えたい。この視点こそが文化庁の推進する「生活者としての外国人」の日本語教育とつながり、新たな「多文化共生」を支える体制作りも展開できると考えている。

③<事業の在り方と継続へ向けて>

本事業では年度ごとのまとめと報告が定められており、毎年2月末から3月初めに東京あるいは関西で「留学生交流実務担当教職員養成プログラム」にて、採択大学や機関が講師となって、委員及び留学生交流の担当者向けに事業の概要と達成度を報告する機会があった。合計3回の報告の場で、外から見て、この事業において達成すべき目標のぶれがないかどうか、また期待されていることは何なのかを常に厳しく助言をもらいつつ修正していったという事実がある。また他の事業報告（全国で10事業が採択）からは、地域によって留学生や在住外国人の数や置かれている状況が全く違う事を数値及び現状としても知りえた。だからこそ、それぞれの地域がそれぞれの実情に合わせた対応を地域ぐるみで考えて実施し、また調整していく必要があることも理解できた。決して他人事ではなく、自分事として積極的に関わる必要があるということを改めて学べた次第である。現時点で当初の計画以上の様々な機関と連携が可能となっている。今後も「とくしま異文化キャラバン隊事業」を通して、一モデルとしての徳島型「多文化共生社会」をめざして活動を継続したいと考える。

徳島型「多文化共生のまちづくり」

- 1) 日本語を共通語に！⇒通じる日本語で「対話」を
- 2) 文化（考え方や習慣）を分かり合う
- 3) 接待文化「おもてなし」から「おもてなしを越えて」へ
- 4) 受け入れる心を育てる 「同化」から「共存」へ

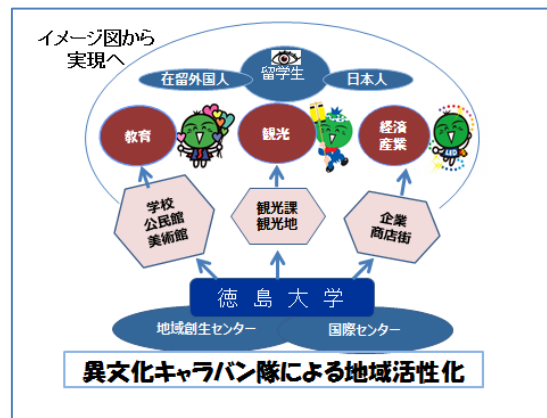


図 7 事業の取組図

[注]

1. 本事業にこれまで累計 1,008 人（H25 年度 168 人、H26 年度 385 人、H27 年度 455 人）の留学生、日本人学生が、とくしま異文化キャラバン隊として県内の地方公共団体、NPO 法人、企業、初等中等教育機関等、39 団体と交流活動を行ってきた。特に、徳島県内の 7 高等教育機関（香川県の 1 大学を含む）、10 の NPO 法人・企業、6 つの地方公共団体との間には、既にネットワークが形成されている。また、平成 28 年 6 月現在、PLAN 1 に関しては、県の教育委員会の中学生及び高校生の国際理解教育のプログラム支援をはじめとして県民暮らし安全局安全衛生課からの「外国人受け入れ事業」モニター等の依頼があり事業が継続されている。PLAN2、PLAN3 もそれぞれ助成金が得られ実施が確定しており、これまでと同様の規模で実施の予定である。
2. 3 年間の詳細は本事業の URL を参照されたい。<http://www.isc.tokushima-u.ac.jp/caravan/>
また PLAN2 に関しては、拙稿「地域と作る演劇と日本語教育 2015-新たな評価の観点から-」第 28 回日本語教育連絡会議報告発表論文集 P. 54-63 に、PLAN3 に関しては、生駒佳也著「グローバル社会の中で地域の連帯を再発見する教育活動」徳島県教育会「徳島教育」平成 28 年 1169 号 P. 46-51 に記述している。
3. 参考文献 S. ゲルモン他「社会参画する大学と市民学習」の 208 ページで、訳者の一人である齊藤が（『日本の大学教育における体験学習への活用』項で）、大学における体験学習を分類している。このように様々なタイプの活動がある中で、キャラバン隊の活動が単なるボランティア活動でも、インターンシップでもなく、留学生と受け入れ側地域の双方に有益であり、たとえば祭りの支援や観光のためのマップ作り等は地域へのサービスでもありフィールド教育でもある。その意味で本事業の活動がサービスラーニングと位置づけられるとする。何よりも活動を動かす教員と参加した留学生の関係だけでなく、現場（フィールド）の組織や団体の存在がこの活動を評価しかつ改善に加わっているという点からも明確であろう。
4. 徳島大学ホームページ 動画集
http://www.tokushima-u.ac.jp/about/publicity/introduction_video/campus_9.html

5. 徳島大学国際センターホームページ出版物

<http://www.isc.tokushima-u.ac.jp/160324-Deliverables-UniTokushima-FlashBook-01>

6. とくしまフレンドシップ憲章は、徳島県が平成20年に制定した外国人住民と一緒に「多文化共生のまちづくり」と「国際化社会に対応した環境づくり」実現のための三つの合言葉と13の行動目標である。詳細は徳島県のホームページを参照されたい。

<http://www.pref.tokushima.jp/docs/2008040200037/>

【参考文献】

- ・ THE O PROJECT TEAM 石原薫訳 (2014) 「シビックエコノミー世界に学ぶ小さな経済のつくり方」
フィルムアート社
- ・ A. ニューバーグ他、川田志津訳 (2014) 「心をつなげる-相手との本当の関係を気づくために大切な『共感コミュニケーション』12の方法」 東洋出版
- ・ S. ゲルモン他山田一降訳 (2015) 「社会参画する大学と市民学習-アセスメントの原理と技法」
学文社
- ・ 加賀美常美代他 (2012) 「多文化社会の偏見・差別-形成のメカニズムと低減のための教育」
明石書店 異文化間教育学会
- ・ 鎌田東二他 (2015) 「スピリチュアリティと教育」 ビイニング・ネットプレス
- ・ 山田泉 (2013) 「多文化教育 I」 法政大学出版局
- ・ 渡辺靖 (2015) 「<文化>を捉え直す-カルチュラル・セキュリティの発想」 岩波新書 1573

付記：

本稿は、H25-27年度文部科学省委託留学生交流拠点整備事業「異文化キャラバン隊による国際化と新たな地域の創成-留学生との交流による多文化共生まちづくり-」の成果の一部である。